第2節　流通手段

第1節では貨幣は「商品の価値を計るものさし」（価値尺度）を学んだ。

第2節は流通手段すなわち貨幣が「商品が世の中をグルグルまわる仲立ちの役割」を展開している。

（商品の流れ）

a　商品の変態

（p.184）交換過程が、諸商品を、それらが非使用価値である人の手から、

〔的場昭弘「超訳『資本論』」〕変態－商品が交換されていくなかで、それを媒介する貨幣が転々と変化しながらも生き残っていくという点にこの言葉の意味がある。

　変態とは、まず商品が貨幣になること（=首尾よく売られること）、次に貨幣が商品になることを意味している。

これをＷ－Ｇ―Wで表現する。

Ｗare　Ｇeld

　商品の最初の試練。商品が価値に見合う

立派な商品として市場で売れるかどうか。マルクスは「まことの恋はままならぬ」といって「命がけの飛躍」を分析する。実際、市場では、商品が買い叩かれたり、価値以上に売れることもある。問題は、この商品の価値は市場で実現してしかわからないことで

ある。経験により、おのずからこの商品会的

必要労働量はわかってくる。

「命がけの飛躍」の別の側面は、買いの過

程である。一方が「Ｗ―Ｇ」であれば他方は「Ｇ―Ｗ」を行っている。この過程は、商品を買う人がお互いに使用価値を値踏みする過程でもある。実際の売買が成立してしまえば、そこに残るのは「価値がどれくらいであったか」だけである。

「Ｇ―Ｗ」の過程は、「金をもった人がある商品を買う」という変態である。これは「命がけの飛躍」ではない。「お里がどこであろうと、お金には臭いがあるわけではない」。こちらはすんなりといく。

〔浜林〕商品Ｗ→Ｇ→Ｗの過程で、最初のＷが後のＷに変わるのが商品の流通である。

最初のＷ(ウィスキー)はいらないが、あとの(バイブル）が欲しい。交換はうまくいかないが、貨幣Ｇ、お金に換えていれば双方とも難なくほしいものを手に入れることができる。その役割を果たす＝流通手段である。

「使用価値である人」：それを欲しがっている人。使いたがっている人。

「社会的素材交換」：社会全体のなかで物が入れかわっていくこと。その人にとって要らないものを、「使用価値である人」(欲しがっている人・使いたがっている人)に移すということが、商品の流通である。そこだけを見れば、社会的素材交換＝社会全体のなかで物が入れ替わっていくということである。こうした物の流れを考えるうえで、その間に金＝貨幣という物が入る（媒介）ということを理解しなければ

ならない。

p.185 諸商品は、さしあたりまず、金めっきもされず、糖衣もほどこされず、大得意で交換過程にはいる。

…この対立の両側は商品であり、

p.186 こうして、商品への交換過程は、相対立し、かつ互いに補い合う二つの変態――商品の貨幣への転化と貨幣から商品への商品の再転化――において、行なわれる…

（p.187）（命がけの飛躍）

　…商品の交換過程は、次のような形態交換において行われる。

　商品―貨幣―商品

　 Ｗ ― Ｇ ― Ｗ

 この運動は、その素材的内容からすれば、Ｗ－Ｗ、すなわち商品と商品の交換であり、社会的労働の素材的変換であり、その結果のなかでは過程そのものが消えうせている。

　Ｗ―Ｇ。商品の第一の変態または販売。商品価値が商品のからだから金のからだに飛び移ることは、私が別のところで名づけたように、商品の〝命がけの飛躍〟である。

…リンネルにたいする社会的欲求が――しかも、この欲求は、他のすべての社会的欲求と、同じく、限度をもっている――彼の競争相手のリンネル織布者によってすでに満たされているとすれば、

…きのうまでは、疑いなく、1エルのリンネルを生産するのには社会的に必要な労働時間であったものが、きょうはそうでなくなる。

Ｗ―Ｇ品物を売る。マルクスは大げさな言葉を使っているが、それは「売れないと困る」ということ。商品は打撃を受けない(在庫)が、商品の持ち主は打撃を受ける。売れるということは、その商品が社会に役立つものある＝使用価値をもっていることを表わしている。さらに、その労働が社会的分業の一部分であり、自分もその一部として世の中に役立っているということ。これらがないとすなわち、世の中に役立っていないと「命がけの飛躍」はできずに売れ残ってしまう。

「大得意で…」：売りに出る。商品はまずいったん貨幣に変わる。その貨幣でまた別の物を買うので、最終的にはまた商品になる。右側も左側も商品、

すなわち「対立の両側は商品であり」と言っている。

商品は使用価値(人の役に立つ)と価値の（労働の生産物）統一である。

リンネルをつくっている人がいっぱいいる。リンネルは過剰となり、無用になる。自分は社会的分業の一部分を担っていたつもりが、実は役立たないとなる。過剰生産になったら商品は売れない。

「1エルのリンエルを生産するのに…」：過剰ではないが、他の人よりもコストがよけいかかるとこれも売れない。つまり、生産性が上がったのに古いやり方でつくっていると、社会的な必要労働時間以上かかっているから、売ることができなくなる。

（p.190）（無政府的生産）

社会的生産有機体の量的編成は、その質的編成と同じく、自然発生的・偶然的である。

…社会的生産過程とこの過程における彼らの諸関係とを彼ら自身から独立させること、

…物的依存の体制によって補完されている

p.191　分業は、この全質変化かどうかを偶然にする。

商品は、社会的分業の一部分を担い、過剰生産にならず、社会的に必要な労働時間で商品生産を行う＝売れ残らないための「命がけの飛躍」が行われることが、商品の流通である。

「商品は貨幣を恋い慕う…」：何とか売ってくれという意味である。

「まことの恋が…」：なかなかそう簡単には売れないの意味、それぞれが思惑で生産して入いるが、思惑通りにはいかない。無計画・無政府であり、売れる・売れないは市場任せである。

「社会的生産有機体の量的編成は…」：生産者の気持ちではどうにもならない。個人を超えたもので人と人の関係は「物的依存の体制によって補完されている」。品物が売れることによって、はじめて、人間関係ができる。人間関係は品物の売買によって補われている。これが資本主義社会である。

「分業は、この全質変化が…」：うまくいくかどうかは偶然だ。うまく売れれば、お金を手にした人が、そのお金で今度は買う方にまわることになる。

p.191販売は購買であり、Ｗ―Ｇは同時にＧ―Ｗである。

買う方は一般的には「命がけの飛躍」は必要としない。

（p.192）（貨幣に区別はない）

商品は、その価値姿態においては、その自然発生的使用価値とその商品を生んでくれる特殊な有機的労働とのあらゆる痕跡を脱ぎ捨て、区別のない人間的労働の一様な社会的対化物へと蛹化している。

…糞尿は貨幣ではないけれども、貨幣は糞尿であるかもしれない。

商品には区別はあるが、いったんお金に換えてしまえば、もう区別はなくなる。貨幣形態においては、すべての商品は一般化される。

「糞尿は…」：何を売ってお金にしたのかは問わない。貨幣は糞尿であるかもしれない。

（p.194）Ｇ―Ｗ。商品の第二の、または最後の変態、すなわち購買。――貨幣は、他のすべての商品の脱皮した姿であり、言い換えれば、それらの一般的譲渡の産物であるから、絶対的に譲渡されうる商品である。

p.196　Ｇ―Ｗ、すなわち購買は、同時に販売、すなわちＷ―Ｇである。だから、一つの商品の最後の変態は、同時に別の商品の最初の変態である。

p.197　一つの商品の循環をなす二つの変態は、同時に、別の二つの商品の逆の部分変態をなす。

Ｇ－Ｗ。貨幣が商品にかわる。商品の第2の、または最後の変態。すなわち購買である。その過程で、4つの極と3人の登場人物。商品を売る。お金を手に入れる。お金を手に入れた人が、それで別の物を買う。1人が二役をする。ここでまた、商品に変わるので極は4つある。つまり、金と物とが姿を変える場所は4つあるが、人間は3人である。これは商品の流れであって、これを商品流通という。

（恐慌の可能性）

p.199 どの販売も購買であり、またどの購買も販売であるから、商品流通は諸販売と諸流通との必然的均衡をもたらすと言うドグマほどばかげたものはありえない。

…自分自身がすでに売ったからといって、ただちに買う必要はない。

…互いに補い合っているために内的に非自立的であるものの外的な自立化が、一定の点まで進むと、統一が強力的に自己を貫徹する――恐慌によって。商品に内在的な対立、すなわち使用価値と価値との対立、特殊的具体的労働が同時的にただ抽象的一般的労働としてのみ通用するという対立、物の人格化と人格の物化との対立――この内在的矛盾は、商品変態の諸対立において、それの発展した運動諸形態を受け取る。だから、これらの形態は、恐慌の可能性を、とはいえただ可能性のみを、含んでいる。この可能性の現実性への発展は、単純な商品流通の立場からはまだ全く存在しない諸関係の全範囲を必要とする。

〔浜林〕－マルクスのブルジョア経済学批判－商品の流通は販売と購買であり、販売は必ず購買である。誰かが物を売るということは、誰かが物を買うことである。したがって売れ残る―必然的均衡―という現象は起こるはずがない。

恐慌はおきないという議論はドグマだと言っている。商品流通の中に恐慌の可能性がある→資本主義の矛盾の一つとして恐慌が登場している。

「ただちに買う必要はない」：いずれは買うかもしれないが、ただちに買うわけではない。時間的にずれが起きる。流通は貨幣をあいだにして、商品と商

品が動くが、つねに両方が結びつくわけではない。売っただけで溜めこみもある。

マルクスは、流通面から恐慌の可能性を指摘した。「ただ、可能性のみ」というのは、理論的にはありうるということ。

b　貨幣の流通

（p.202）貨幣が絶えずその出発点から遠ざかる

「流通」：カレンシー－流れていく。サキュレーション－グルグル回る。

「遠ざかる」：物を売ってお金に変える。そのお金でまた別の物を買う。お金は永久に手元からはなれていく。いったん自分の手から離れたお金は戻ってこない。

（貨幣はどれくらい必要か）

（ｐ.205）商品世界の流通過程のために必要とされる流通手段の総量は、すでに諸諸品の価格総額によって規定されている。

…流通手段の総量における変動は、この場合、確かに貨幣そのものから生じるけれども、流通手段としての貨幣の機能から生じるのではなく、価値尺度の機能から生じるものである。

貨幣は流通手段としては、絶えず商品流通の中に入っていって、そしてまたそこから出ていって、その間をグルグル回っている。その場合、流通部面でどれだけの貨幣が絶えず吸収されているかが問題になる。売り出されている商品の総額だけの貨幣があれば売り買いに不自由しないはずだ。商品の価格の総額を流通速度で割ったものが貨幣の必要総量である。

16世紀のヨーロッパで物価上昇が起きた。メキシコの銀が流入したからだと説明されているが、マルクスはまちがいだと説明している。お金が大量に入ってきたから物価が上がったのではなく、メキシコで優良な銀鉱山が発見されたために、銀の価格が下がったから他の商品の価格が上がったのだ、ということ。

マルクスは貨幣数量説（通貨の量が増えると物価があがる）を批判している。銀の価値が下がったから物価が上がったといっている。

（ｐ.207）諸流通手段は、諸商品の実現されるべき価格総額によって規定されている。さらに、いま、どの商品種類の価格も与えられたものと前提すれば、諸商品の価格総額は、明らかに、流通に出回っている商品総量によって決まる。

ｃ　鋳貨。価値章票

（紙幣）「貨幣は金である」として議論してきたが、実際には金以外にいろいろなものが使われてきた。

　お金に価値を与えたもの－金銀それ自体の中に価値＝内在的価値があるからだ。

紙幣はどうなる－国がその権限を与える＝貨幣法定説。

マルクスは、国家に権限があるとする。お金のなかに入っている金属の値打ちとお金の額面が崩れてくると説明する。

p.218　‥名目純分と実質純分とが、その分離過程を歩み始める。

金属の値打ちとお金の額面がずれてくる。最初1ポンドあった物が、中身は1ポンドでなくなってきた。

p.218　鋳貨の金存在を金仮象に転化させる。

実在：あるもの。

仮象：見せかけ

p.219　金属貨幣を他も材料からなる標章または象徴で置き換としてある可能性を‥

補助鋳貨、銀、銅、アルミニュウム。紙幣が出てくる。

p.221　相対的に無価値な物、すなわち紙券が、金の代わりに鋳貨が機能することができるようになる。

p.221　ここで問題になるのは、強制通用力を持つ国家紙幣だけである。

日本銀行券

（紙幣はどれくらい代役がつとまるか）

p.222　紙幣流通の独自な法則は、金にたいする紙幣の代理関係だけから生じうる。

金の代理をするだけである。ほんらいなら10兆円の金が回っていなければならないが、何分の1かを紙幣にする。これが金の代理。

p.223　もしきょうすべての流通水路がその貨幣吸収能力の最大限にまで紙幣で満たされるとすれば‥

「水路があふれる」；インフレになる。

お金の方が余ってしまい、商品の流通に必要な額以上に紙幣があふれ出てくるかもしれない。

現在、金準備はあっても兌換はしてくれない。マルクスは全般的信用崩壊の危険があるといっている。恐慌のもう一つの可能性である。

取付け騒ぎ－銀行に押しかけ、「金に替えてくれ」のパニックである。紙幣の裏付け国の信用。昔は、円紙幣は流通する範囲が限られていた。

（了）